

第32回
土中に眠る歴史をやさしく掘り起こす
～考古資料から歴史を考える～
下森弘之（一滴の里学芸員）
平成28年3月20日



土中に眠る歴史をやさしく掘り起こす

早川 みなさま、こんにちは。今日は第32回名田庄多聞の会によるごそお越し下さいました。本日の講師は、このポスターにありますように、一滴文庫の学芸員の下森弘之さんです。「土中に眠る歴史をやさしく掘り起こす、考古資料から歴史を考える」という題でお話をお聞きます。やさしく掘り起こすということで、楽しみにしています。(笑)下森さんの略歴を簡単に紹介します。下森さんは、1978年(昭和53年)大分のお生まれで、別府大学大学院で文化財学を専攻され、別府大学文化財研究所の非常勤研究員、別府市役所の文化財専門職員を経て、どういいうわけか九州からこの地に来られまして、(笑)、2012年から一滴文庫に学芸員として在職されています。それでは下森さん、お願いいたします(拍手)。

下森 みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました下森です。まず、このような場を作っていただいた関係者の方々にお礼を申し上げます。お礼の次はお詫びなのですが、実は、私あまり話がうまくありません。お聞き苦しいところがあったら、どうかご勘弁願いたいと思います。それからもうひとつお願いですが、本日お話しする内容は、皆さまからするとこことは別の世界のことになるかも知れませんが、話の中に出てくる道具は皆さまが使っているものと比べてみていただきたい。話の中に出てくる人の行動などを周りの人間関係と比べて今日の話聞いていただきたいと思います。

今回のお話をはじめにいただいたとき、「さて何の話をするかな」と、正直、色々と迷ってしまいました。「何々の話をしてください」だったら、すぐに取りかかることができたのですが、とある方から「あなた、何か話出来るでしょ？」という、とてもふんわりとした依頼をいただきました。「ああ、いいです」と応えたのですが、それから何の話をしようかと考えたので、けっこう迷いました。

私、確か2年くらい前に、ここ名田庄西谷の宝篋印塔(ほうきよいんと)や五輪塔などについて一滴文庫の機関誌「一滴通信」に一文書かせていただきました。あれはなかなか分かりにくいところもあり、それを詳しくし、そのときの地域の時代背景なんかと絡めて話を進めると地元の話なので、みなさんけっこう興味深く聴いてもらえるのかなとも考えていました。そのほかでも、民俗学のことでも「調べ始めていた時期だったので、柳田國男や宮本常一などの著名な民俗学者が多く名田庄に調査に来て、いろんな地元の面白い話があるので、地元の話なら皆さんも興味深く聴けたのかも思いました。

今思うとここの話でもよかつたのかもしれないね。それとも、せっかく私自身が一滴文庫のような文化施設に所属させていたお供です。博物館や美術館をより楽しむための話や、自分は図書館司書の資格も持っていますので、図書館の便利な活用術などを合わせて話をする面白さだけではなく、これからの生活にもプラスになるのかなどと、漠然と考えていました。

そして、最終的に何にしたかというところ、考古学の話をしように決めま

した。なぜ土に埋もれた歴史の話をしようと思ったかというと、単純にこれまで自分が勉強してきた分野がこの歴史学のなかの考古学という一分野だったからです。といつても、こちらに来て4年以上経っていますし、その前も1年は勉強していませんでした。正直言っても6年以上考古学の勉強をしていないので、かなり記憶も薄れて、今回この話をしようと思つて取りかかったのですが、本当にもうすっかり無くした記憶との戦いで、そういったものを引っ張り出してくるのがけっこう大変でした。そういうような状態で今回の話を準備してきました。

今回、お集りの皆さまのお顔を拝見させていただくと、だいたいどこかでお会いした方々みたいですので、皆さまからすると、私の顔を見て「ああ顔はみたことある人だけど、何やつてる人かな？」という人もおられるかもしれませんね。それでまず、まず自分自身から見つめ直すというところも含めて、自己紹介からはじめさせていただきます。

私は、現在、大飯地区にある若州一滴文庫で学芸員をしております。学芸員の他に図書館司書の資格ももっております。なので、先ほど少しお話したように博物館や図書館の使い方という項目もお話の候補にあげさせていただきました。こういった文化施設の使い方を知っていると、う方は意外と少ないのです。文化施設って本当の使い方を知っていると、楽しさも倍増しますし、とても便利なんです。使い方をマスターすると、確実にインターネットよりも便利な一面があるんです。話が逸れてしまいましたので、元に戻します。

私は一滴文庫に来る前は、地方の役所で埋蔵文化財の専門職員とい

うことで仕事をさせていただいておりました。そして、その前は自身の出身大学で考古学分野の非常勤研究員という肩書きをいただいて、言うてしまえば、プラプラと遊ばせていただいております。

ここで、考古学という単語が出てきましたが、考古学というものはどういったものなのか。このスライドをご覧ください。考古学を一言で表現すると「考古学とは、過去の人類の物質的遺物を資料として人類の過去を研究する学問である」と。ちよつと分かりづらいかも知れませんが、このスライドにある赤色で書かれたところ、「人類」と「物質的遺物」の二つがキーワードになります。要するに、人類の痕跡を探る学問ということになります。なので、発掘調査などによって「恐竜の化石が発見できました!」は、考古学ではありません。これはたぶん古生物学になるはずです。逆に極端な例になります。発掘調査で調査区内から、例えば、1980年代のコーラの瓶が発見されました、そして、そこから、そこから何かが見つかる、それはもう考古学ですね。例えば、誰が捨てたとか、誰が埋めたか、そこにどういった意志があつて物を埋めたのかなど、そういったものが分かってくると、それは、もう考古学の分野になってきます。実際、何年か前に明治大学が発行した発掘調査報告書のなかにそんな例が確かあつたかと思えます。

このようななかで、一度みなさんに訊いて見たいことがあるのですが、皆さんが知っている考古学という学問は、どのようなものですか。ニュースや何かで考古学に対するイメージはどんなものですか? (会場、あまり反応なし)。イメージするようなものはないですか。テレビなどで縄文

時代の人骨が発見されました、そして、小さな刷毛などでちよこちよことかかしている、そんなイメージでないかと思えます。それも考古学の一面ではあるのですが。

では、私がこのような考古学という学問のなかで、さらに何を専門として、どのような調査、研究を進めてきたのか、というところから話を進めていきます。

研究説明、報告書説明

ちなみにこれが私の調査研究の略歴になります。主要なものだけ出しております(スライドに詳細なリスト)。発掘調査報告書とあるのは、発掘調査とかで得た遺物をまとめて、それを一般の方々に見ていただけるように報告書という形で書籍を刊行します。これはその一覧です。次の刊行物というのは、市役所にいるとき、文化財関係、市や国や指定の文化財がいろいろあるのですが、それらをまとめて解説して本にしたものです。最後の論文・口頭発表等は、学会などで発表したものの一覧です。これら三つのうち一番下の一覧が自分の専門の内容のものとなります。これらを見てもらうとお分かりいただけるかと思いますが、私の専門は、考古学のなかでもいわゆる石器という石を扱う分野になります。その中でも、その石がどのように流通していくのかとか、その構造がどうなっているかなどをこれまで詳しく研究してきました。

石は、それぞれの種類で異なる特徴を示します。大きくは、火山岩と堆

積岩。細かくは、安山岩や凝灰岩、流紋岩や黒曜石など、様々な種類に分類されます。そのなかでも特に黒曜石という種類の石は、日本の旧石器時代から縄文時代を経て、弥生時代や古墳時代、そして現代に至るまで使用されています。ちなみに、海外では、黒曜石のメスを外科手術に使ったり、カミソリの刃として現在でも使っているところがあるので、それほど切れ味を持った石になります。しかもこの黒曜石ですが、これは、理科学的な測定にかけるとどここの産地の石かわかります。なので、各遺跡で出た石器を分析にかければ、この石はどここの地域の石ですと分かる。少し経験を積みめば、肉眼観察でもある程度の産地同定ができます。これが黒曜石の大きな特徴になります。

今日は石のサンプルを持つてきました。おもに九州で産出する石です。少し時間をとりますので、ぜひ前にお進みいただいて、実際に石に触れてみて下さい。

サンプルとして持つてきてもらった石を見る

(これらは全部黒曜石ですか)

いや、全部が黒曜石ではありません。中には安山岩や頁岩などの他の石も入っています。この黒い石は佐賀にある腰岳から産出される腰岳黒曜石です。黒曜石は割れ口がとてもきれいですね。気を抜いていると指なんかすぐに切れます。黒曜石は黒く光っているように見えますが、中にはこのように透かしてみると中は緑色をしたものもあります。これは

中米で産出する黒曜石で、昔大学の先生のお土産としていただいたものです。(参加者は透かしてみても、感嘆の声を上げる)



黒曜石は含まれる成分でけつこう色は変わってくるのです。北海道の白滝産の黒曜石は中が赤いのです。自分が勉強していた姫島産黒曜石は真っ黒でなく灰色をしています。この白い石、これも黒曜石です。安山岩に近い石です。これは自分で作った石の槍です。簡単に作れます。ただし、慣れないと手が傷だらけになります。皆さん、触ってみて下さい。九州の石なのでなかなか触れないと思います(笑)。この赤いのは頁岩とい

われるものです。

(これはどうやって割るのですか)

石と石をぶつけて割る方法もありますし、細部なんかは鹿の角などで押し割つたりもします。鹿の角は柔らかいから、そんなものでは割れないのではないかと言われますが、割れます。鹿の角を押し当ててぐつと押すと割れます。

(こういう石を細工するための石は何なのですか)

これが原石です。これよりも柔らかくて粘りのある石、たとえば安山岩だとか流紋岩などで叩くと割れます。端の方などを鹿の角なんかで押し当てると割れていきます。鹿の角などはソフトハンマーと言われるものです。鹿の角は柔らかくて粘りがあります。石どうしでやると砕けてしまいますので、細部の調整などはソフトハンマーで。これは実際に鹿の角で作った矢尻です。これはサヌカイト(かんかん石)という石で、互いに叩くと高い音が出ます。江戸時代、火打ち石として使われていました。火はものすごく重要なものだったので、火を絶やさないと文化があつたりしましたので、火を付けるのはものすごく大変でした。これは緑泥片岩という石で割ると薄く剥離していきます。こういったものに使うかという石、石碑・板碑として使います。これは阿蘇の黒曜石の中にぶつぶつのようなものが入っていますが、割ると思わぬ形になることがあります。この腰岳産黒曜石、とてもきれいですね。昔は、ブランド品だったので(笑)。これはかなり遠方まで運ばれています。これではいけないという旧石器時代の人がいました。遺跡からはこういう加工品のほか原石も出るこ

とがあります。黒曜石は全国で確か50箇所くらいで、どこにでもあるというものではありません。黒曜石がない地域もあります。安山岩や凝灰岩は、日本は火山地帯なので、どこにでもあります。黒曜石は限られた地域しかないので、産地分析ができることになりました。(参加者は、雑談を交えて盛んにサンプルの石に触る)

―サンプルを使った説明終わり―

旧石器時代

ここで、旧石器時代からの発掘調査の写真を順番に皆さんにお見せしたいところではありますが、私、実は旧石器時代の発掘調査に関わった経験がありません。石器の研究をしていながら、おまえ何なのだとやれそうですが、遺跡に携わった経験がないので、写真はありません。それでも話だけはしておかなければならないので、少しだけこの時代の話もします。

日本に人が住み始めたのは、何時頃からか……。実は、これは難しい問題なのです。確か、私が大学の学部生のときだったかと思いますが、この問題に関して日本の考古学会を震撼させた一つの事件がありました。かなり大々的なニュースにもなりましたし、今でも関連書籍を書店で見かけることがあるので、もしかしたら、ご記憶にある方もおられるかもしれませんね。何か記憶にある方っておられますか？

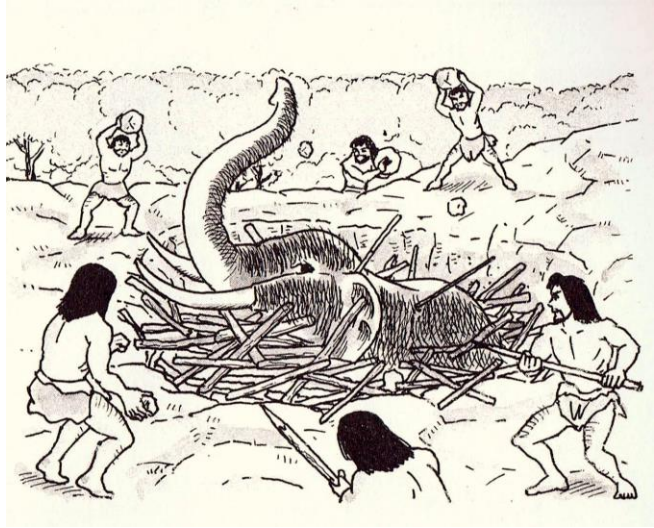
(会場から、偽物の遺跡だった?)

はい、正解です。旧石器ねつ造事件です。当時、大々的なニュースになりましたね。この事件の当時、私はコンビニでバイトしていたのですが、朝送られてくる新聞を、眠たい体で、棚に配置しているときに、ちようど一面に、毎日新聞だったかと記憶していますが、旧石器ねつ造の記事が目に入り、とんでもない衝撃を受けた記憶があります。

その前までの数ヶ月の間に日本人の起源が10万年単位でどんどん書き換えられていくということがありました。ほんと、数ヶ月の間にです。それまで、旧石器時代の中でも、後期旧石器とか、中期旧石器とか、その辺までしかないのではないかとわれていました。それが、急に、何十万年、何十万年と、どんどん古くなっていったのです。こんなことってあるんだ〜、と感心するだけだったのですが、その当時のことを思い出すと、ある先生が「こんなことが本当にあるのか？もしかしたら、層位(地層)を間違えているだけじゃないだろうか」という話をちらつと聞いたことがありました。確か、日本人の起源が68万年前に遡りましたという報道があったそのあとだったと思いますが、毎日新聞の旧石器ねつ造事件が報道されました。「青天の霹靂」というやつでしょうかね。

あの事件のお陰で、旧石器時代の研究がゼロから再出発しなければならぬ状況になりました。その後、学会等でも一からの見直しなどの検証が進められ、現在では十数万年前の前期旧石器時代に属するものもあるということになっていますが、この分野は今でも各研究者が真摯に研究を進めている状況です。従って、今後、様々な角度から検証された日本人の起源がどんどん発表されていくと思います。

せつかくの機会ですから、旧石器時代人の生活で一つだけ分かりやすい遺跡の例をあげて、簡単な説明をさせていただきます。これから紹介する遺跡は、実際に私が関わったものではないのですが、生活の一旦を考えるうえでは面白い遺跡だと思います。その遺跡は、長野県の野尻湖畔にある遺跡です。この野尻湖では古くからナウマン象の歯の化石が見つかっていました。「ここにナウマン象がいたのなら、きつとそれを食料にしていた人々もいるに違いない」ということで、確か昭和37年頃から学術的な発掘調査が行われています。その結果、ナウマン象やオオツノジカなどの動物の骨や、様々な石器、狩猟具なども多数発見されました。ナウマン象に限って言わせてもらうと、体の大きさはだいたい3mから4mくらいあります。人間からしたら、とても大きな獲物です。しかも、ゾウということは、行動は群れをなしていると考えるのが普通でしょう。そういったものであるので、どんなに考えても一人や一家族程度の人数で対処できるものではありません。たぶん、狩猟の期間には、できるだけ周辺地域から大人数を集め、ナウマン象などの大型動物を、落とし穴や沼地などの身動きができないような地点に追い込み、身動きがとれないような状態で、石を投げつけたり、槍や棍棒など刺したり叩いたりして徐々に追い込んで弱らしていったのではないかと思われまます。そして、見事にナウマン象をしとめることができたなら、その場で解体し、皆で戦利品として分け合っていたことでしょう。この例も、当時の生活を考えるうえで貴重なものだと思います。



ナウマンゾウの狩人

(「絵と写真」で学ぶ日本の歴史□「東洋館出版社から転載」)

縄文時代

では、話を進めて縄文時代という時期区分に移りましょう。この縄文時代は、それまでの旧石器時代とは大きく異なる点があります。それ

は、土器と弓矢の発明です。これは当時としてはとても大きな発明でした。

まず、土器についてですが、それまでの限られた食材と調理法(ストーンボイリングや直火、生食)による食事から、土器が発明されたことにより栄養摂取での環境が飛躍的に向上しました。たとえば、お肉をスープ状のものとして柔らかく煮込むこともできますし、植物質食糧のあく抜きなども簡単に行うことができます。これらの発明は人類の発展にものごく貢献したと思います。しかも、それが発明された時期も問題です。日本の縄文土器は約1万6千年前までその発生がさかのぼると考えられています。これほど古い時期の土器は、世界を探しても、日本を含む東アジアの数カ所で発見されているのみです。確か、アフリカやヨーロッパでは、1万年より古くなる土器は出土していなかったのではないかと思います。

次に弓矢の登場ですが、これも画期的でした。それまでの投げ槍と比べて、正確な射撃ができます。少ない動きで、遠方までの到達性があり、貫通力があり、どれをとつても格段に向上しています。どなたかが、実験した結果によると、投げ槍よりも4倍の距離の獲物をしとめる事ができたと書かれたものを読んだ記憶があります。そして、石の矢鏃は鉄の矢鏃と比べても、そんなに遜色のない貫通力をもっていたとの話も聞いたことがあります。もちろん、これだけをもつて縄文時代が語り尽くせるわけはありませんが、この二つの道具の重要性は欠かすことはできません。

私は、その中でも特に石の道具について勉強してきましたので、少しその話をさせていただきます。

先ほど見て頂いた黒曜石の中でも、灰色の石があったかと思いますが、それが姫島で産出される黒曜石です。特徴的な色調なので、遺跡で発見されると割と簡単に姫島産だとわかります。もちろん、類似の色調をしている黒曜石もあることはあるのですが、そちらはあまり使われていなかったようで、理化学的な分析をすると、ほとんど姫島産黒曜石と出ます。この姫島産黒曜石は旧石器時代からの使用を確認でき、縄文時代早期後半から前期にかけて爆発的に使用量が増えてくる石材になります。

このような縄文時代という、車や電車などの交通機関がないときに、この姫島産黒曜石は産地から直線距離で200キロ以上離れた地点からも発見されています。確か、関西圏からも数点出土の類例があったかと思えます。ただし、この姫島産黒曜石だけが遠方まで運ばれたという特殊な存在ではありません。例えば、九州には他にも、佐賀県の腰岳から産出する有名な黒曜石があります。この腰岳産黒曜石は、遠く韓国でも出土例があるほどです。

そんな遠方までどうやって運ばれたのか。また、韓国までというと、海をはさんでいますね。姫島も周りが海です。こういうところからどうやって運ばれていたのか。

この質問に答えるための指標として、一つの遺跡を提示いたします。遺跡の名前は横尾遺跡。大分県で一番大きな大野川という川の支流で

ある乙津川の近くに開けた縄文集落です。この遺跡からは、10キロを越える重さの姫島産黒曜石の原石や剥片といわれる石器を作る素材になるものを集めた集石のようなものも発見されています。そして、この黒曜石の集石は、植物質繊維で作られた網かごに収まった状態で発見されています。なので、縄文時代には網かごに入った状態で持ち運びされていたのではないかと思われます。網かごに入った状態で発見されていること、川に添った場所に遺跡があったことなどを考えると、船で姫島に渡った縄文人が、持ち運びしやすいようにある程度の使いやすい形にまで成形し、網かごに入れて集落まで持ち込む。そして、そこからまた次の中心的集落(中継地)にまで運ぶ。それも多分、ある程度河川を利用した運搬方法が使われていたのではないかと想定できます。そのようにして、中心的集落から少しずつ周辺の集落に分配される……、いや分配という用語があるかもしれませんが、分配もしくは互恵されて徐々に遠方まで運ばれる。横尾遺跡は、姫島から直線距離で50キロ程度離れている大分市内にある遺跡ですが、遠方でそのような遺跡というと島根県の匹見町に、横尾遺跡ほどではありませんが、姫島産黒曜石の多く出土する遺跡なども発見されています。

では次に、少し縄文時代の遺跡を発掘する現場の写真を見てみましょう。



池の岡遺跡発掘調査(愛媛県北宇和島郡津島町) 縄文時代早期～

これが調査をして
いるときの写真で
す。写真奥にコンボ
が見えますね。発掘
調査はまず、大きく
表土を器械でゆっく
り剥いでいきます。
その後、大きなス
コップなどで全体を
同じくらの高さにな
る程度に掘り下
げていきます。

そして、遺構が出そうな高さになったら、道具を小さなものに持ち替えて少しずつ掘り下げていきます。この写真は縄文時代でも古い方の遺跡なので、遺構という生活の痕跡が地面に残っていることはほとんどありませんでした。そこで、遺物という土器や石器がどの位置からどんな高さで発見されるかが重要になってきます。

この写真をよく見るといっぱい串が刺さっているのが見えますね。この串が刺さっている場所は遺物が発見された地点であることを示しています。

考古学の発掘調査は、考古学者だけが進めていくのではなく、色々な専門家が調査に参加します。例えば、写真家や自然科学や地質学などの学者さん、そして、実際に作業してくれるのは地元に住む普通の人です。時にはシルバー人材派遣会社さんをお願いしたり、農家の人にお手伝いをお願いしたり、普段は、考古学などに関わらない人たちも現場にいる場合があります。

昔、自然科学分野の先生から聞いた失敗談として、調査が終わって皆が宿舎に帰ったあと、一人残って作業しているときに、調査区にゴミが残っていると(笑)、親切心から全部串を抜いてゴミ箱に捨ててあげたそうです。そのゴミ箱に捨ててある串を見て作業員さんが驚いて現場に戻ったら串が一本もないと。作業員さんがものすごく落胆したというのは言うまでもないことですし、この自然科学の先生は、まだ若いときの失敗だったらしくて、考古学担当の先生からとても怒られたそうです。あんな怒られ方は二度とないだろうと思えるほど怒られたと笑いながら話をしてくれました。

これはその遺物の位置を測定しているところですね。高さを測定しています。このとき使っていた機械は少し古い機械で、XY軸は分かるのですが、高さは別の機械で測定しなければならなかった。平面の位置を測つてそのあと高さを別の機械で測る、そのようにしていました。今は一度の測定で位置と高さができます。これは写真撮影しているところです。時には座り込んで撮影、時には脚立の上から撮影したりしていました。ひどい時には、学生時代に先生がいない間に、電柱に昇って撮影というこ

ともありました。これは見つかると大目玉なので、いまだに先生には内緒です(笑)。今までに、一番ひどかったのは、調査区のすぐ隣に6階建のビルが建っていて、そのビルの屋上上がり、フェンスを乗り越えて友達にベルトの後ろを握ってもらって身を乗り出して撮影した写真もあります。このとき私は、高い所は苦手ではなかったのですが、さすがに一度だけでギブアップしました。今だったらドローンを飛ばせば一発で終わると思います。

弥生時代

次に弥生時代に移ります。縄文時代から何が変わったたら弥生時代になるか、一言でいえば「文化」ということになります。その中でも分かりやすい出来事であれば、「稲作」の導入というところでしょうか。これも多分学校の授業などで出てくると思いますが、農耕という社会基盤の確立は、日本の歴史上かなり大きな時代の変革です。この弥生時代に入ってから人口の増加は、ものすごいものでした。それまでのもの(縄文時代)とは比べようもありません。原因は複数あるでしょうが、その一つに稲作が関わっていることはまず間違いないと思います。

しかし難しいのは、農耕というものは完全に弥生時代に属するものというわけではないのです。縄文時代にも中期農耕論や晩期農耕論など、様々なものがあります。「稲」自身も縄文時代から日本にも入ってきています。いわば、農耕を受け入れる社会的基盤(文化水準)が完成した

結果、この時期に、稲作という文化が日本に根付いたのが弥生時代であるといえるでしょう。

九州の北部、いわゆる福岡県や佐賀県などの縄文時代晩期には、すでに稲作が始まっています。使われている土器や社会的組織などは縄文時代のものなのですが、きちんとした水田を整備したりして全国に先駆けて、稲作という面から見れば、弥生時代に入る作りをしていて、弥生時代の早期という時代区分が考えられています。

そして、この弥生時代のことについても、色々話をしたいところですが、そんなことをしていたら時間がいくらあつても足りませんので、私が関わった弥生時代の発掘調査から一つの面白い遺跡を選んで話を進めさせてもらいます。

その遺跡は、大分県別府市に所在する「円通寺遺跡」です。

この遺跡の面白いところは、弥生時代後期後半といわれる時代になります。いわゆる次の古墳時代に移る直前の時期にあたるのです。皆さん、高校や中学校の時の授業を思い出してもらいたいのですが、この時期、日本で一人有名人がいませんか。日本史上初めてでてきた有名人です。(会場から、卑弥呼)

そうですね、卑弥呼です。弥生時代の終わりから古墳時代の初頭にかけて、生きていたであろう人ですね。その人と今紹介するこの遺跡とはほぼ同時代なのです。卑弥呼は確か没年代が二百四十七年か八年といわれています。それよりちょっと古いかないといわれるのがこの円通寺遺跡です。

それでは、この円通寺遺跡ですが、そもそも大学の新校舎建設に伴う発掘調査として始まりました。私が別府にいた頃、第六次調査まで進んでいました。では、この図面をご覧下さい。第一次調査は、だいぶ遠方なのでこの図面には入り切れていませんが、第二次から第六次調査までこの図面に描かれています。この図面だけでは、少しごちゃごちゃしていますので分かり辛いと思いますので、個別を提示します。

これが第二次調査区の全景写真ですね。写真上に黒いシミが3ヶ所見えるかと思えます。この黒いシミが弥生人たちの住居の痕跡です。この時代は竪穴式住居、俗に言う、地面を掘りくぼめてそこに屋根を付けて建てたもので、その住居を使い終えて廃棄されたあとその地が窪地のままになっている、その土地に別の種類の土がたまりまます。この地は、元々の土地が白っぽい地質の場所だったので、その廃棄後のくぼんだ地面に別の黒っぽい土が溜まり、黒いシミのようになるので、そのようなところを掘っていくと住居の跡や、柱の穴などを検出することができます。

これは円通寺遺跡の第四次調査区になります。実は、今、第三次調査区が抜けたのですが、自分が最初に発掘の仕方を教えてもらったのが円通寺遺跡の第三次調査区だったので、残念です。しかし、どれだけ探しても写真が出てこなく、やむを得ず省くことになりました。自分にとつてはかなり思い出のある調査区だったので、それで第四次調査区ですが、ここでも住居の跡がそこかしこに見えます。この第四次調査区も自分にとつてとても思い出の深い調査区になっています。

それがなぜかというところ、これです。調査区の住居跡から一枚の青銅器が発見されました。しかも立った状態で発見された古代の青銅鏡、カガミです。それまで、約二千年間近く土の中に埋もれていて、二千年ぶりに地表に顔を出しました。このとき、本当に発掘調査って面白いなと思いました。

この青銅鏡なのですが、今このように写真を2枚出していますが、上の写真が発掘調査時の取り上げ直前の写真で、下が取り上げた後に保存処理を行った物です。どちらがきれいだと思いますか？完全に上の方掘り出した直前のものがきれいですね。発掘の時、土を剥いだそのときが一番きれいだったのです。二千年間、泥のバックで無酸素状態で保存されていたので、二千年の時間がそこだけ止まっていたのです。土を剥がした途端二千年の時間が一挙に流れて、本当に短い時間に真っ黒になりました。たった数分だったと思います。出てきたとき、すぐに写真を撮ったのですが、撮っている間もどんどん黒ずんでいきました。なので、元の二千年前の状態を見ることができたのは発掘調査の現場にいた人間だけです。

ただ、ここに行き着くまでには、まあ大変な毎日でした。写真を見て頂ければ分かるかもしれませんが、至る所に大きな石や小さな石がころがり、歩きにくいし掘りにくい。大変な調査区でした。こんな石ころだらけの場所に、なんでこんな大きな集落を作ったのか不思議です。こんな住みにくそうなところにたくさん住居があるのがとても不思議でした。でも、こういうところにも住まなければならぬ理由があったの

だと思えます。この集落が次の古墳時代の基礎にもなるので、その点は重要な要素です。

これが第五次調査区です。これにも黒いシミがありますが、ここが住居の跡になります。この調査区で記憶に残っているのは、鉄器の出土量が非常に多かったことですね。さびてこのような状態ですが、鉄の斧や小刀などが何点も出てきました。この円通寺遺跡では、大分県内の同時代の遺跡に比べても鉄の道具の出土量が多かったです。あまりに鉄の道具の出土量が多かったので、調査指導の先生が冗談に「この遺跡の弥生の人たちは温泉の入湯料に鉄器でも取っていたんじゃないか」って言うていました。何か他の遺跡にはない特殊な事情があったのかもしれない。

次は、第六次調査区です。この遺跡も数カ所に住居跡を検出しましたが、それ以外にも特色ある遺物を検出することができました。それは、この図の真ん中にあるぽつんと赤い丸で示してあるものですが、何かというところ小児用甕棺です。住居のすぐ横から出てきました。甕棺というものは九州を中心とした弥生時代に特徴的な墓形ですが、あとで詳細な説明をしますので、まずはこれを見てください。よくみていただくと分かるかと思いますが、土器の表面に赤い筋のような線が数条見えませんか？この土器を復元したらこうなります。出てきた二つ土器、それを半分に分けて、それぞれを被せ合わせるように設置して、甕棺として使ったようです。この甕棺の設置上の大きさは、長軸でもメートルもありません。なので、小児用の埋葬具だと思います。このように放射状の筋

などが確認できるので、ただの埋葬具というだけではなく、多分に祭祀的な意味合いを含んでいる気がします。

ちなみに、甕棺といつても、皆さんピンとこないと思いますので、簡単に説明させていただきます。



これは福岡県的那珂川町だったかと思いますが、発掘調査の現地説明会のときに撮影した写真です。こういうふうに大きな甕を二つ合わせて棺桶にしているものです。

この甕棺、大きいものでは長軸が2mを越えるものもあります。写真を見ていただきたいのですが、全てがこのようになっていてはありませんが、甕棺の中身は、片一方は内部が赤く染まり、もう一方は黒

く染まっています。そして、人骨と装身具のゴホウラ貝の腕輪が見えます。これから考えると、かなり身分の高い人だったのではないかと思います。九州の弥生時代前期から中期では、このような甕棺葬が盛んに行われていました。このような出土遺物から、弥生時代の人々の精神世界を垣間見ることもできます。

弥生時代の最後に、この円通寺遺跡で出土した土器を見て下さい。そして、実際の土器も持ってきています。皆さん、もう一度前にお進みいただき、ぜひ手に取ってみて下さい。

この土器は、円通寺遺跡のすぐ近くの畑から拾ってきたものです。これらの土器も、弥生時代後期後半という時代のもになります。東九州を中心とする一帯で出土する安国寺式土器というものです。これは須恵器と呼ばれる古墳時代の土器になります。焼きが全然違います。触ってみて下さい。博物館ではなかなか触る機会がないと思いますので。

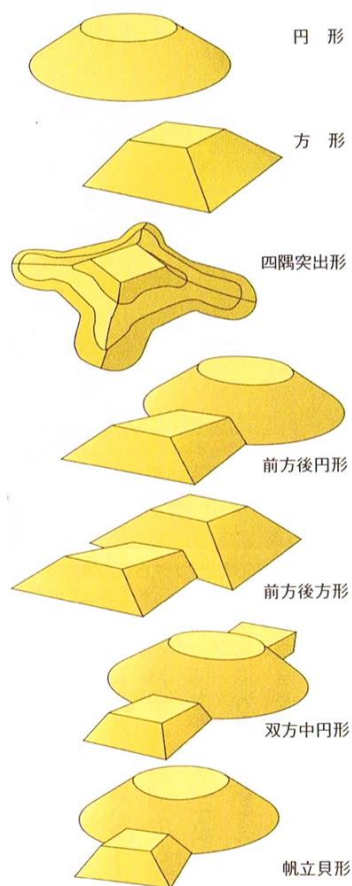
古墳時代

では、次の古墳時代に移りましょう。この時代について、まずは、簡単な古墳の説明をしないとけませんね。

古墳の発掘調査をしているといつも訊かれることがあります。それは、「誰のお墓ですか？」「や」といくら前に造られたものですか？」「などです。中には「これって、そもそも何ですか？」というものも、です。古墳が何であるとか、何時造られたものかには、割と簡単にお答えすること

ができます。「誰のためのお墓ですか」と問われるとなかなか答えにくいです。日本各地に「○○天皇陵」というのがありますが、多くはその名前と古墳の築造年代が大きくかけ離れていることがあり、確定は難しいものばかりです。そのようななかでも有名なのは、卑弥呼の墓ではないかと言われる箸墓古墳。九州では、継体天皇の時代に反乱をおこしたといわれる筑紫君磐井の墓といわれる岩戸山古墳。それぞれ、築造年代と日本書紀や筑紫国風土記などの文献、そして埋葬者の没年代などから比定されているものです。

古墳の形にはいろんなものがあつて、一番有名なのが、みなさまもよくご存じかと思いますが、鍵穴の形をした前方後円墳というものです。



でも、一番多い古墳の形としては、この図の一番上にある円墳という円形のもので、たぶん、9割以上が円墳だと思っています。ここ名田庄でも2基、発見されているのは円墳だったかと思っています。その他にも、様々な形の古墳がありますが、ここに出ているもの他にも、少し変わった特殊な形のものもあります。

そして、内部主体といわれる埋葬施設ですが、初期古墳は竪穴式石室といわれる墳丘上部から墓坑を掘り、棺を納めるタイプの物でしたが、四世紀の半ばからだんだんと横穴式石室というタイプの埋葬施設が日本でも導入されてきました(初期は北部九州から)。この横穴式石室という施設は、それまでのものと異なり、石室という埋葬部屋を古墳内部に持ち、部屋の扉をあけると追葬という行為が可能になりました。しかし、当時のことを考えると、最初に埋葬された方から、少しして近親者が亡くなられたら、石の蓋を開けて次の方を埋葬する…。前に埋葬された方は、たぶん腐つて…。と、そんな故事からきていると考えられているのが古事記などの記述にみられる「イザナギ・イザナミ神話」です。

イザナギ・イザナミの二人の神が国造りのために奮闘しますが、その途中で妻であるイザナミがお亡くなりになります。しかし、まだ国造りは途中。夫であるイザナギは、何とか妻をこの世に連れ帰ろうと黄泉比坂を進み、国造りが途中なのでなんとか戻ってくれるように妻に懇願します。そこで「帰るまで振り返らないで」という一つの誓いを夫婦でするのですが、ついついイザナギは約束を破って振り返ってしまいます。そして、妻の顔を見ると、至る所の肉が腐りおちてウジがわいているような状態。すでにイザナミはあの世の食事である「ヨモツヘガイ」を行ってしまっていたのであの世の人となっていたのです(古事記)。しかし、旦那はこれを見てビックリ! 追いつかなくてくる妻を振り切つて現世に逃げ、あの世とこの世の境に石の蓋をしました。するとイザナミは、よほど悔しかったのでし

よう「一日にあなたの国の人間を1000人殺しましょう」と叫びました。それに対するイザナギは「ならば一日に1500人生み増やしましょう」と答えます。

ここで重要になり、本日の話にも反映される点は、あの世の食事をとるとあの世の住人となるという点と、あの世とこの世を分ける石の扉という点です。

では、これらの前置きをふまえて、実際の調査の話に移りましょう。写真は、これまた別府市から出土した箱式石棺という埋葬施設です。この発掘調査が行われていたとき、私は確か大学で非常勤の研究員をしていた時だったかと思います。この発掘は開発に伴う緊急調査として市が実施したのですが、調査の途中から大学が協力するということになり、学生たちを連れて調査を進めることになりました。

この箱式石棺は、扁平に成形した凝灰岩の板状の石を6枚合わせて棺桶にしたものです。左側の石棺から、人骨は検出できませんでした。しかし、東西を主軸にして、遺体の頭は東、足は西を向いていたようです。なぜ、人骨も出土していないのに頭の向きがわかったかというと、東側の床面に粘度で積み上げられた枕状の高まりを検出したからです。棺の大きさは長軸が約2.3m、短軸が約1m。周辺には溝の痕跡も見えますので直径約6m程度の台状墓の主体部と考えられます。造られた時期は、一緒に出土した須恵器からだいたい5世紀の中葉と考えられます。これが石棺の近接写真です。左が今説明したものになります。写真右側のもも、同じく6枚の板状の石を組んでいます。長軸が1m、短軸

が50 cm程度と、左側と比べるとだいたい半分程度の大きさになります。こちらはたぶん6世紀の中頃に造られた物だと思います。サイズから考えると、これは小児用と考えて大過ないでしょう。

写真左側の石棺内部からは剣と刀が各一振り、鉄斧が一振り、ガラス製の小玉と耳管が数点など出土しました。そして、棺の内部には赤色顔料、ベンガラ(酸化鉄)が大量に入っていました。

検出位置から想像すると、この副葬品は被葬者の胸の位置にあつたものと思われるので、埋葬時に被葬者に刀と剣を抱え込ませるように安置したと思われる。

発掘調査後、この2基の石棺は現地から取り外して移設し、野外で展示することとなりました。こちらが、その作業風景ですね。実は、これも結構大変な作業になりました。小さい方は、人力でも問題ないくらいだったのですが、大きな方は、一枚一枚の板材がとんでもない重さだったので、クレーンを用意して、出来るだけ傷が付かないように養生して、5人がかりでクレーンの位置まで運びました。これを考えますと当時、この石棺を造つた人、設置した人、墳丘を築く人が、どれだけ苦労したか分かります。

その他、同じ別府市内には、古墳時代の遺跡として国の指定史跡になつている鬼の岩屋1号墳と鬼の岩屋2号墳、太郎塚・次郎塚・鷹の塚・天神畑古墳という4基(現存3基)の古墳を有する実相寺古墳群、そして金比羅山横穴墓群、平原横穴墓群などがありますが、次は国の指定史跡になつている鬼の岩屋古墳について話をさせていただきます。

この鬼の岩屋古墳は、古墳時代の後期、だいたい7世紀を前後する時期に築造されています。

鬼の岩屋古墳は、一号墳の方が古く一号墳の方が若干新しい造りになつています。内部主体はともに横穴式石室となつています。この古墳がなぜ国の指定史跡となつたか。実は、この辺りではあまり見る事ができない特徴を持っています。それは、装飾古墳という特徴です。横穴式石室の部屋の壁面に赤、黒、黄色などを使い、様々な模様を描いています。この装飾古墳は、全国に約600基、そのうちの6割程度は九州に集中しています。

では、写真をご覧下さい。確か平成21年くらいだったかと思いますが、九州国立博物館との共同研究で奈良文化財研究所の文化財写真の先生と一緒に写真撮影による調査研究をさせていただきました。確か、これがその時の1枚だったかと思います。奥に玄室という遺体を安置する部屋があるのですが、それを羨道という入り口部分から撮影しています。この写真を見て、皆様は何か感じませんか。そうです。先ほどお話したイザナギとイザナミの国造り神話の一節ですね。まるで、人が死んであの世に渡るときに通る黄泉比坂のような感じはありませんか。ちなみに、この古墳、もうあの世とこの世を分ける扉はありません、フルオープンなので、墳丘内に入るときには注意が必要です。

この古墳も周囲に試掘を行つて墳丘規模の確認調査を行いました。現在、墳丘周囲を柵で囲っているのですが、その内部が国の指定史跡となつていることから、柵の内部を容易に発掘することはできず、柵の外

部で勝負を賭けようと意気込みましたが、なかなか思うようにはいきませんでした。

鬼の岩屋一号分石室内部の模型です。一番奥に玄室という遺体を安置する部屋、その中には石屋形という遺体を寝かす、小さなとか一人用の家のようなつくりの物があります。そして、その前の部屋が前室、この前室と玄室の間の石にはまるでカンヌキをはめるかのような割り貫きがあります。そしてその先は、内部と外部を結ぶ羨道といわれる道です。全体を赤く塗っているのも、装飾の一環です。なぜ国の指定になったか、それはこの装飾によるものです。下地にベンガラによる赤色を塗布、その上から同心円紋と呼ばれる文様、三角形の文様、連続的に山形の三角を並べた鋸刃縁紋など様々な文様を描いています。こういった各時代に生きていた人々の精神世界を覗くのにお墓というのは最良の資料だとは思いますが、それを探るのは甚だ難しい。しかし、石室内部の構造、いわゆる装飾と石屋形という埋葬設備から、どうも肥後方面との強いつながりを感じます。このような構造をつくる古墳は豊前豊後よりも、肥後の方に多くみられます。

次に鬼の岩屋2号墳です。こちらも装飾古墳です。しかし、装飾はほとんど残っていません。この古墳、墳丘規模と石室のサイズに若干の問題があります。石室の大きさは高さが4m、幅も3mほどもあり、ものすごく広い空間となっています。強いていうなら奈良にある石舞台古墳の一回り小さくなったような感じですが、そして墳丘についてですが、平成20年に墳丘の規模確認調査を実施しました。

その結果、それまで20数m程度と思われていた墳丘規模が、30mを大きく越える36mの規模であることが確認できました。これは、発掘調査によって、古墳の周囲に石を張り巡らせる葺石の最下段の寝石(墳丘端部)を検出することができたために判明した規模になります。

写真からも見て取れるように、石室はこういったふうに天井まで約4m、幅は3m以上、奥行きも4m以上ある。この時代、これほどの石室構造と墳丘規模を持つものは、近隣ではみあたりませんでした。埋蔵施設には扁平の石の台座があり、そこを死床というのですが、そこにこういうふうに横に細長い繰り込みが二ヶ所ありました。これは何かなと思つて、その周りに装飾があつたので、多分、辟邪(へきじや)といわれる目の装飾でないかと思えます。悪いもの、魔を寄せつけないためのもの、しつかり見ているわけです。エジプトの絵画なんかにもありますね。あれと同じような意味なんでないかなと考えています。類例がないのでなんともしえませんが。

これは、他の地域の横穴墓の写真ですが、こちらをご覧下さい。これは、大分県竹田市の法地坊横穴墓です(次ページ)。見て下さい。このように断崖に横壺列に穴がポコポコと開いています。この穴の一つ一つが、先ほどの横穴式石室の簡易版のようなものです。これは、同じく竹田市の市用横穴墓群です。こちらは、実測作業のみですが私が参加した遺跡です。こちらは、入り口の穴の周りに飾り縁という額のようなものがついています。こちら内部は玄室を持つ石室のような状態になっています。



これは人骨ですね。以前に、横穴墓の発掘調査の見学に行っているときに、たまたま閉塞石という蓋石を外す瞬間に立ち会ったことがありました。閉塞石が開いた瞬間の湿った空気、明らかにこちらの空気とは異なるもの、この世のものではない感覚がありました。そして、担当者が内部にライトを入れて、それから「入ってもいいよ」と、当時学生だった私たちを内部に入れてくれました。入り口はかなり狭く、這って入りましたが、入ってすぐに横を向くと人骨がごろんと転がってこっちを見ているのです。しかも、その顔は真っ赤に染められている。これは気持ち悪いなと思って、顔をそらし、反対側を見ましたら、反対側にももう一体の人

骨があり、その人骨もこっちを見ているのです。しかも同じように顔が真っ赤に染まっているのです。このように頭蓋骨が赤いということは、肉はもうないので血管もない。ということは、内的な要因ではなく外的な要因で赤く染まっているということです。要するに、赤色顔料を塗布されているということですね。しかも、被葬者を埋葬する段階で、顔を赤くベンガラで染める。肉は時が経つと腐って分解されますが、ベンガラは割と安定した物質なので、そのままの場所に残る。間にあった肉が完全に分解されると、ベンガラはそのまま頭蓋骨上にこびりつき、顔が赤く染まる。ということでしょう。

この写真は調査の風景を写したものです。この人の肩に猫が乗っていますが、この人は自分の同期で友達なんです。いくら追っ払っても猫が肩に乗ってくるのです。それで肩にちよこんと乗っている。あとはもうそのままでした。面白い写真ができたのでお見せしました。

隠れキリスタンの仏塔

これは寛永時代につくられた隠れキリスタンの仏塔です。寛永時代におこったキリシタン関連の事件というと、皆さん何か思い当たることはありませんか。

(会場から、「島原の乱」)

そうですね、島原の乱です。この隠れキリスタンの仏塔を見ると、キリシタン弾圧がどれほどひどかったか分かります。

私が市役所にいるとき、市民の方から「たしか、別府市内にそういった隠れキリスタンのものがあるかもしれないと聞いていたのだけれど」という問い合わせがありました。当時私はそのようなことを全く知らなかつたので、文化財調査員の先生に話を聞くと、「もうだいぶ前、そのような調査に関わったことがある、市内には50点をこえる隠れキリスタンの遺物がある」ということで、それで一緒に調査を行いました。それまで市内には50点ほどのキリシタン遺物が所在していたようですが、調査時には20数点しか発見することができませんでした。

ここで少し日本のキリシタン事情を簡単に説明しましょう。最初にキリシタン宣教師が日本に来訪したのは、確かイエズス会のフランシスコ・ザビエルだったかと思います。単純なキリスト教というものはもつとだいぶ前に日本にも入ってきているとは思いますが。中国では景教という名でネストリウス派のキリスト教が入ってきていました。それが日本に来ているかは、よくは知りませんが。

しかし、キリスト教の宣教師は日本のまさに変革期といえる16世紀の半ばに来訪したので、時々の権力者に翻弄されたと言つていいのかもしれない。何といつても、信長が権力を握り、秀吉が日本をまとめ、家康によつて以後200年以上に渡る政治基盤の確立ができた時代、俗にいう安土桃山時代から江戸時代という時代のお話です。キリスト教について極めて簡単にいうと、信長は承認、秀吉は承認から否定、家康、いやこの場合徳川家ですね、徳川家は否定といったところでしょう。この時代は、権力者の意向に左右される、それは先ほど言った三名のことばかり

ではありません。秀吉時代にキリシタン信仰が認められていたのは、各国の大名がキリシタンを認めるかどうかなので、例えば以前の大河ドラマで「黒田官兵衛」をしていましたが、官兵衛はキリシタン大名ということなので、その支配地の一般人もキリシタン信仰を認められていたという事です。

では、大分県はどうかというと、当時は府内という名で呼ばれていました。キリシタン大名の大友宗麟がいました。なので、ものすごい数のキリシタン信徒がいました。しかし、時が変わりキリシタン信仰が禁止されると、信徒は地下に潜るしかありません。信仰とは、そうそう変えられるものではありません。信仰を捨てないのであれば国外追放、もしくは死刑。捨てるのであれば仏教徒に戻ることを確約しなければならぬ。「キリシタン転び文書」というものまである始末です。私は、仏教徒です、決してキリシタンには転びません。という宣誓書のようなものです。

それでは写真を見て下さい。(会場から)「この仏塔のどこがクリスチャンのですか」

よく見て下さい、十字が分かりますか。



右の写真の丸の部分拡大したのが下の写真です。

この写真の丸の中、十字が切られています。

こちらの写真はお地藏さんですが、ひっくり返すと十字が切られています。その次、これは傘の部分をつくり返すと、そこに十字が隠されています。正確には十字でなくてT字になっています。(右下の写真)



これは笠と土台が別のものです。上の身の部分、そこには十字が切られていますね。写真の下は、傘の部分をひっくり返したものです。ここにはT字が切られています。他の例では、傘の部分がT字、身の部分もT字、合わせて十字になるようになってるものもあつたのです。ひっくり返されたときにも単独では十字になっていないようにしてあるわけです。そうでないと首を切られてしまうので。言い逃れができるように二つ合わせて初めて十字になるように工夫されていたのです。

次は、四角い台座の上に○形の突起が付いている物です。当初、これは、石灯籠の基礎(土台)か何かだと考えていましたが、基礎にしては凹んでいるべきところが凸でいたり、判断に苦しむ作りになっていました。

これが隠れキリスタンのものであると分かったのは、実は、文献を調べているときに、どうもキリスタン関連の資料に「マリア様」という名前をもじって「マルヤ様」で、「丸」に屋形の「屋」でマルヤと表現しているものが

ありましたので、それだと思えます。これだと分からないので、こうやって隠していたのではないかと。

次は、以前に私が作った文化財に関する冊子の表紙です。何なのか分かりませんか。人間の顔に見えませんか。これ、分かり難いのですが、額に十字が掘られているのです。これは昔調査していたときに先生が持っていた写真なのです。キリストらしいです。どういう状況で発見されたかというところ、これは田圃の石垣になっていたのです。このキリスト像の裏面は未加工の自然石だった。あるとき、その石垣がぼろっと外れて落ちたとき、その裏面がキリストの顔だった。隠すために見える方は自然石のままにしてその裏面にキリストを彫った。礼拝の時は外してそのときだけ裏面を出して礼拝していたのではないかと考えられています。

これは隠れキリスタンの調査をしたときの図面です。一見したところ、普通の仏塔のように見えます。この3点は、市内にある真言宗系の八坂寺というお寺で大切に保存されていたもので、笠の部分に十字でなくてXの形、アンドレアクロスというのですが、それが掘られています。聖アンドレスがX型の十字に架けられて磔になったという故事から、このアンドレアクロスを彫った。

よく、なぜ普通の宝篋印塔などに見分けがつかぬと言われますが、相輪といわれる上の笠の部分ですね、こんな形のもは日本の仏塔ではほとんどないのです。大分では隠れキリスタンでないか思ったときには、笠から上の部分を見てちよつと形が変わっている、たとえば、この部分が異様に長いとか。この図にある、これは普通のものにちかいです、こつ

ちは異様に長いですね。このようなので、隠れキリスタンのものかどうか推測が付くので、この図を示しました。

図面を製図してこういったふうに一覧にしてありますが(スライドにはたくさん)のキリスタン塔の図が出ている、下の方の段ですね、これらは今回ほとんど見つけることができませんでした。真ん中に描かれているのも何個か見つけることができませんでした。もともとこれまで別府市内には50点近い数のキリスタン遺物の存在が確認されていましたが、

この調査時に発見できたのは20数点で、先日帰郷して確認できたのはそのうちの十数点でした。自分が大分を離れて5年、その前の調査したのがその数十年ほど前、つまり、ここ数十年の間に、仏塔か何か分らないかなって、無縁仏のほうに追いやられてしまつて分からなくなつたのではないかと思えます。もしかして、自分の記憶違いで見つけられなかったのかも知れませんが、多分、これから先、これと同じような調査ができないようなことがあるのではないかと。そのためにも、こういった図面をしっかりと作つて残しておくことが大切で、もちろん図面だけでなく、写真と注記、文字で表現しておくことが重要になってくるのではないかと思います。

図面を描く

これが考古学で使われる実測図です。磨製石鏃や石包丁、砥石に叩石、台石などあります。この図の中には姫島産黒曜石のスクレイパーと

いう、石器もあります。この中で面白いのは、砥石です。実は、図面じやわかりにくいとは思いますが、右側の一番右上のものなんか軽石を利用した砥石でした。皆さん、軽石みたいな柔らかいものが砥石になるって信じられますか。

最初、遺跡を発掘しているときに軽石の片面がすり減って真っ平らになつているものが何点か出土し、これは何だろうと気になっていました。周りの人に聞いても、よくわからないとこのことで、類例を調べてみました。発見できませんでした。自分は、これは砥石でいいのでないかなと思つていたのですが、この時、発掘に参加していた友達なんかは、「きつと、弥生人の踵の角質取りに使われていたんだよ。」なんて言っていました(笑)。私は砥石だと思つて、他の調査書を調べてみたのですが、こういう軽石を砥石に使つていた例は発見することはできませんでした。いろんな人に聞くと、そういえば弥生時代の遺跡から扁平の軽石が出土したことがあつたという話は聞くことができました。ですので、扁平の軽石⇨砥石説を研究してみようと考え、実見してみました。軽石の中に含まれるガラス質の粒子については知つていたので、実際に海辺に落ちている軽石を拾つてきて、さびた鉄の道具なんかの砥石として利用できるかやつてみたのですが、すると、きちんと砥石として利用できることが判明しました。砥石にも、荒研ぎ、中研ぎ、仕上げ研ぎといった段階研ぎがあるので、その最終段階で、この軽石の砥石が使われていたのではないかと思ひました。

これが土器の図面です。この土器の図面を書くのにも取り決めがあり

ます。たとえば、この図面の高杯、お茶碗のような物ですが、お茶碗を上から見て、全体の4分の1をカットして、こちらの正面から見たものを描かなければならない。そして、内部、表面、断面と描きます。そういうふうを描くと、土器がどういったふうに作られているかとか、そういうことが分かるようになります。土器が完全な形で出てくることは少ないので、遺跡の中から拾い集めて、こういうふう到一个のものに作り上げるのですが、どうしても完全なものではない。それで、ここからは、こうなつていたでしょうと点々で示したりします。この点々は粘土の接合面です。土器を作り上げる段階で全部をいっぺんに作り上げるわけではなくて、まず土台の部分を作つておいて、粘土が柔らかいときには上に乗せるとつぶれてしまうので、若干乾燥してその後の部分をのせることとなります。こういう手法だと時間ずれが生じるので、粘土がどうしても完全に繋がらなくて、接合面ができてそれが分かります。そういうことも図面に描くこととなります。

これは須恵器の提瓶です。これは、円形ではありませんので、一方向からの図面だけではその全容を書き残すことはできません。なので、正面と側面の2方向から描いています。これは完全な形で古墳の墳丘内から出土したと伝えられる遺物なので、内部を実測することができませんでした。実測図で描き残すには限界があります。これを補うのが注記です。内部に手や指を突っ込み、感覚でどのようになっているかなど、できるだけの情報を言葉で残します。

次も、須恵器ですね。これも古墳の墳丘内部から出土したと伝えら

れるものです。そして、その次が須恵器の坏身と坏蓋ですね。ここにはヘア記号という生産者を示す記号が坏蓋の内部に確認されました。

この坏身と坏蓋は須恵器が日本で作られて終わるまで、ほぼ途切れることもなく作られているものなので、この坏が出土すると、だいたいのくらの時期に作られて使用されたものかすぐ分かります。特に面白いのは、この図にあるように、「ハ」という字が蓋の部分の裏側に描かれています。これは「ヘア記号」といって、いろんな集団の人が土器を作るときに自分の集団の記号のようなものです。

まとめ

最初にもお話しましたが、皆さんにとって「遠い昔」とは、どこからだと思いますか。例えば、今回、最後に話をした隠れキリシタンの痕跡を調査しているときに、仏塔の所有者から話を聞いていたら、「あまりこの家にそんなことがあったということは、触回らないで下さい」と言われたこともありました。この隠れキリシタンというのは、1620年前後のことですが、仏塔には、「〇〇家」と彫られているので、自分のご先祖さまのお墓であることが分かります。この人にとっては、1600年代の寛永という時代は、まだそんな昔ではありません。確実に自分に繋がっている時代です。

そして、発掘調査で出土した遺物を整理しているときに思うのは、縄文時代や弥生時代などの石器や土器、そして鉄器など、現代とそんな

に変わらないものの形だということですね。素材は変わっても同じ形の道具が何千年間も使われています。縄文時代は一万数千年前ですが、発掘調査に携わってきた私からしたら、こんな物を使う人たちは本当に大昔の人なのかと思ってしまう。例えば、古墳を造る技術。古墳の形は全く同じでも階級差によって何分の一の古墳を築造するなんてこともあり、その縮尺たるやぴたりなのです。造成技術だけではなく測量技術も現代とそんなに変わらない技術をもっていたと思います。古墳造成も今から1500年以上前のことですが、技術面からもそんな大昔のことと感ぜません。

現代、学校の授業などで、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良平安時代などなど、よく時代ごとに名前を付けて、それぞれ別のもののように教えられます。しかし、そんな括りなんて現代人が便宜上つけているだけで、本当はどこにもありません。時代は流れて連続しています。ここに私がいるのは、過去から繋がって、そしていまここにいます。そこに区切りをつけているのは、あくまで現代人です。歴史は過去から現在にいたるまで切れ目なく繋がっています。これが、どのような意味をもつか、それぞれ皆さんにも今回考えていただきたいことの一つです。では、なぜわざわざこんな発掘調査をするのか？ 現在、考古学の発掘調査のほとんどが、遺跡破壊に伴う緊急調査です。遺跡は一度開発によつて壊されてしまうと、二度ともたに戻すことはありません。もちろん、それは発掘調査でも同じことです。発掘によつて遺跡を掘り返すことは、同時に同じ意味で遺跡破壊をしていることとなります。まさに発

掘とは一期一会のものです。なので、そのときに出来る最高のパフォーマンスを目指し、出来るだけ多くの情報を残せるように努力します。ただ、開発に伴う発掘調査の場合は、常に時間との戦いも同時にしていかなければなりません。発掘調査を担当するということは、考古学的な一面、要するにそこで歴史的なものを解明したいという想いと同時に、行政的な一面、開発によって壊されるそれがいつから始まるのか、いつまでこのままなのか、等を考えてその時間の中で最善を尽くす。そういうことを考えながら、発掘調査の担当者は調査を行っています。

そして、なぜ、このような発掘調査で発見されたものを博物館などで展示するのか。それは、歴史を考えるとということが、より良い未来を選ぶための骨子になるということに繋がるからだとは私は考えます。少しでも多くの経験や知見から、この先を考える、そして自分の根っこになるのは、自身が生まれ育った土地がどのようなところで、どのような関係性のなかに自分という存在がいるのか。何から繋がって自分ができるのか。先ほどの道具の話と一緒に、人間は、何千年たついても、そんなに変わってないものです。それをわからせてくれるのも展示の一つの意味かと思います。博物館などの展示は、ただ見て楽しむというだけにとどまるものではありません。そこから何かを感じとってもらうことができるかということも、展示を企画する側の人間の力量だと思っています。

本来、このような会では、何か核になるような話の筋を決めて、それを説明するといったことの方が、正当で、かつ皆さまにも分かりやすく、終了後に納得して帰っていただけたかと思えます。例えば、「姫島産黒

曜石の流通とその流通構造から縄文人の行動原理を考える」であるとか「石器の獲得戦略にみる縄文時代」とか。または、「魏志倭人伝にみる邪馬台国の実像」とか。テーマを絞れば、タイトルを見ただけで何を話して、何を覚えて帰れば良いかが明確になります。しかし、今回あえて通史的に歴史を外観してきました。それも、私の目を通して見た歴史です。なので、地域的にも皆さまとはあまり関係の薄い九州という地域の歴史になります。しかし、なぜ今回このような形式にしたかということにも考えがあつて、それは、皆さまに薄くてもいいので、少しでも多くの認識を持つてもらいたいと考えたからです。そして、自身の経験にないものを見ることで、身の回りにある歴史に気持ちがあく切掛けになつてくれればと考えて通史的な内容のものにしてみました。

身の回りにある歴史とは皆さま自身のことになります。それで、今回の話を頭の片隅にでもおいて、周りを見ると、これあのとときあそこで聞いた話と何か違うとか、何か違和感があるなど感じていただければ良いのかなと思います。

民俗学者の宮本常一という人が「物事見るときには常に基準になるものが必要だ」と言っています。私の物事を見る基準は、これまでの30数年間、九州で調査をしてきたこと、いろんなところでいろんな話をしたこと、いままで見てきた多くの文化財や博物館、美術館、図書館などと、私が今立っていることがどのように異なっているのか、その異なっている要因は何か、何が優れていて何が劣っているのか？と常に考えるようになっています。

これが本当に最後になります。もう一人民俗学者の話を少しだけして、それで終わりにさせていただきます。その民俗学者は遠野物語などで有名な柳田國男。柳田は、晩年多くの弟子を育てました。その弟子達に常々言っていた言葉があるようです。それは、「郷土史研究とは、ただ郷土のことを研究するのではなく、郷土に住んで郷土の研究をすることです」と言っていたと聞いています。それを考えると、このおおい町の郷土史を研究するのは皆さんひとり一人でないかと思いました。今日私が話した内容の一部にでも、本当にさっき言ったみたいに違和感を感じ、周りの文化に目を向けたなら、その瞬間から皆さまの郷土史研究が始まるのではないかと考えています。これで話を終わります。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

早川 どうもありがとうございます。それではこれから質疑応答に入ります。

講演後の質疑応答

参加者 A 黒曜石を分析すると産地がどこかと分かるというお話ですが、地域によって成分がちがうのですか。

下森 成分が異なるので産地同定をするとはつきりと出てきます。ただ、自分は理化学的なことは詳しくないのですが、目で見て色調だとか雲母が多いとかで、肉眼でもある程度の分類はできます。

参加者 A 地域が同じなら違うのが出ないということですね。

下森 そうです。

参加者 A 面白いですね。あと、もう一点ですが、最後の方の隠れキリシタンのお話の時に、もうそのようなことは言い出さないと欲しいということだったとお聞きし、意外だったのですが、今でもそういうことは地域では悪いイメージとしてあるということですか。私にはそういうイメージはないのですが。

下森 そうではなくて、その個人の方のご意見だと思えます。その家はその当時かなり弾圧をされて苦しい思いをされていただろうと思います。隠れキリシタンのなかには殺された方もおられただろうし、日本から追いやられた方もいます。キリシタンであることが分かり、キリスタン転び文書(もんじょ)——私はキリシタンではありません、仏教徒ですという証文——まで書かされた。そういうことがあったことが息子、孫とどんどん言い伝えられて、ひどかったのであまり触れたくないという記憶があるにでないでしょうか。その方の場合は、文書にも〇〇家という名前がはつきり出ていたので、余計そうだったのではないかと思えます。辛い過去だったのでできればそつとしておいて欲しいということだったと思えます。

参加者 B ああいうのを建てられるということは当時としてはけっこう身分の高い人だったのでしょうか。

下森 それなりの身分だったと思います。寛永の時代では多少お金を持つていれば一般人でも建てることはできたと思います。ちなみに、この西谷の宝篋印塔を調べましたが、あれは本当に素晴らしいものでした。あれだけのものは一般人ではできません。それなりの格式のある人にな

いとあれだけの規模のものは建てられません。

参加者B あの時代の隠れキリシタンの場合はどうだったのでしょうか。

下森 まず、隠れキリシタンについて簡単に説明します。安土桃山時代の信長はキリシタンを承認しました。自分がバレン鼻真だったので。次の秀吉になった段階で、最初は承認していました。途中から、これはまずい、日本を乗っ取られるかも知れないと思い、追放に走りました。その次の徳川家康、家康というより徳川家、これは完全に排斥に入りました。その土地の大名がキリシタンだった場合は、その領地の人々はキリシタンになることのできたのです。大分では大友宗麟というものすごい勢力をもったキリシタン大名がいて、その時代、その土地の人はキリシタンになることができませんでした。時代が変わり、キリシタンを排除する時代になったときに、秀吉の時代は国外追放、徳川家のときは首切り。なので、どうしても隠さなければならぬ、しかし、信仰はそう簡単に変えることはできません。だけど、死にたくない。それで隠れキリシタンになって信仰を続けた。先ほど説明しましたような、仏塔の一部に十字を入れたりして、分からないようにして。

参加者C 円通寺遺跡からたくさん鉄の道具が発掘されたという話がありました。それらのものは近くで作られたものだったのでしょうか、それともどこから運ばれてきたものだったのでしょうか。

下森 弥生時代の後期にその近辺に、自前で鉄を作ったという事例は発見されていないのです。どこからか搬入されてきたものであると考えています。鉄を作っていれば、たとえば、砂鉄がなければならぬとか、いろ

んな鉄の端切れのようなものも出てこなければいけない。また、火力も必要になりますので、そのような遺構が出てこないといけないのにそれらも発見することができませんでした。なので、たぶん、外から来たものでないかと考えられています。

参加者D 考古学にかんする一般的なことなのですが、地面を掘るわけなのですが、ここなら宝物が出てくるということを誰が判断するのですか。

下森 実は目安があるのです。この町にもあると思いますが、埋蔵文化財包蔵地というのが地図にドットされているんです。文化財保護法という法律がありまして、埋蔵文化財が出ますよという括りの中に入っているとどこで建物を建設する場合は、事前に試掘調査をしなければならぬことになっています。それでは、ドットが打つてあるといったそのような地点はどうやって分かったかというと、昔の人が歩いて、ここから土器が出てくる、何か出てきそうだとチェックを入れて、分類のドット図を描いているのです。そういうところで何か建物でも建てるとなると、発掘調査をしないといけません。試掘調査ここは遺跡であると分かると全面的な発掘調査になります。そのような地点でないところで工事が始まった場合、なにか遺物が出てきたら必ず届け出をしてくださいます。法律で規定されています。

参加者D そのあと発掘調査が終わったらまた埋め戻すのですか。

下森 はい、埋めます。

参加者D その埋めても良いよというのは誰のですか。

下森 それは調査をしている人間です。発掘調査が終了して記録をすべて取り終わりました、ここまでは後は壊されてもかまいませんという時点で埋め戻します。一番重要なのは現代の人たちの生活なのです。生活を壊してまで遺跡を守るか、遺跡はそれほど重要なのか、天秤にかけるのです。それはものすごくプレッシャーなのですが、それをやらなければならぬ。その判断は各行政の文化財担当者なのです。それでうまくいった例が佐賀県の吉野ヶ里遺跡です。あそこは、担当者がものすごく心労の中、これはもしかして邪馬台国に繋がる遺跡かも知れないと思つて、工場誘致の土地だったのですが、保護した。工場を誘致して雇用を増やすか、歴史に目を向けるかの判断だったのです。それはとても大変なことです。それでいていこのころでは調査が終わったら遺跡は壊されてしまいます。

早川 ちよつと伺いたいことがあるのですが、黒曜石が九州の中でずいぶん広まつて行く図がありましたか、あれはどのようにして広まつていったのですか。必要な人がもらいに行くのか、このようなものがありますからと、いわば売るようにして、売るといふことにはないにしても、拡散していくのか。

下森 その質問にお答えしたいのですが、本当に難しい問題なのです。分かつている範囲でお答えすると、運搬方法は適当な大きさに割った状態で編み籠に入れて運んでいるのです。そして、中継地と呼ばれる地点があるのです。そのあたりで中心地になるような地点、人が集まるようなところ、そこに持つて行つて分配していると思われます。それは等価交

換ではないですし、ましてや売買という概念ではないと思つています。そのような物を持つていることはつながりを示していることになるので、何らかの方法で順々に伝播していったと考えられます。姫島の例でいえば、姫島の人が一括で管理していたとかではなく、いろんな集落の人が行つて採取して、そこで交流も生まれて遠方に広がつてく。河川を伝わつて上流に広がつていく。

交易の方法としてはいろんなものがあつて、文化人類学では無言貿易というのがある。たとえば、姫島の黒曜石を持つて行つてどこかに置いて置いた人は隠れる。しばらくしてそこに戻ると、黒曜石と同じくらいの価値のあるものがそこに置かれている。境界で全く見えず知らずの人と出会うのは怖いことなのです。怖いのでこういった交易が行われていたのではないかという説です。交易でなくて、互恵に近い。もちろん物々交換もあつたでしょう。こつちの地域にはこれがないから、それをちょうだいと。人類学者のマリノフスキーが、ニューギニア島東沖にあるトロブリアンド諸島でクラ交換の調査をやつたことがあるのですが、それは何かというとき、貴重なものを持つているとそれを持ち続けていることは悪いことなので、それを順々に次の人に渡していかなければいけない。渡した方は損じやないかと思われるかも知れませんが、ぐるっと回つていつか自分のところに戻つてくる。だけど、自分のところのためにため込んでおくと、周りから「なんだあのけちゃんぼ」と言われるから、自分のところに貯まつたものはどんな次の人に分け与えていく。

早川 もうひとつだけお訊きします。石棺とか甕棺がありましたか、あ

これは位の高い人のためのものだと思うのですが、普通の人はどうやって埋葬したのですか。

下森 分かっている範囲では、土壙墓(どこうぼ)といつてただ穴を掘って埋める方法があります。なぜそんな穴(窪み)が墓だと分かるかということ、日本の土質は酸性土壌なので人骨はすぐになくなって、出土しないことが多々あるのですが、埋葬と同時に供え物として供えるもの、石の鏝とかは残っているので、人がはまりそうなくらいの穴にそういった副葬品と考えられる物が添えられていると、これはお墓だと判断します。

早川 火葬と土葬の区別は考古学でつくのですか。

下森 遺構の大きさと判断という形になるかと思いますが。土壙(トコウ)に埋まっているなら土葬ですね。土葬に比べたら火葬の方が新しい概念です。人ひとり燃やすのはかなり大変です。それを縄文人や弥生人がやろうとは思わない。それよりも、屈葬と言って、手足を折り曲げて、小さくしてその分だけの穴を掘ってそこに埋葬する。面白い例としては、縄文時代の貝塚。貝を捨てたゴミ捨て場ですね、その中に人骨が入っていることがよくあるのです。周りが土でなくて貝なので人骨が保存されていて出てくるのです。ゴミと一緒に人は捨てられていたのかということとそうではなくて、捨てられた貝はゴミではなくて、また帰って来いという再生の概念で捨てられている。人もそこに置かれるのは、人もまた帰ってこいという概念で置かれた。戻ってきてくださいという輪廻転生的な概念が縄文時代や弥生時代にもあったのです。

参加者 A 発掘した後、また戻すということでしたが、できるものは博

物館などで展示しますね。掘り出した遺跡をそのまま残してみんなに見てもらえるような遺跡は今少ないのですか。

下森 少ないですけど、それでもあります。先ほどいった吉野ヶ里遺跡もそのまま展示されています。東北の方では三内丸山遺跡、あそこもそのままです。発掘調査で貴重な遺跡であるとなつたときに、開発をそこで進めるのか、それとも止めて遺跡をそのまま残すのか、それを決めるときにかなり葛藤するのです。大分県でもそういった例があつて、自分がまだ学生だったので直接は関わってないのですが、海部郡衙政庁跡といわれる中安遺跡というものが発見されました。この遺跡は、その時代の役所の初期の跡、全国でも数例しかないような遺跡だったので。その当時、運動公園だつたと思いますが、そのようなものを造るので工期も迫っている。どうするかという議論で、文化財担当者は、首になつても良いからこの遺跡は残すべきだと進言したそうですが、結局、上位の判断で残さなかつたという例があります。しかし、多くの遺跡が単純に利害だけで壊されるのではなく、壊す予定のところを少しずらして、そこに盛り土をして残すことや、企画を変更して公園用地にして保存するなどということもありうる。いろんな案がある中で、せめぎ合いのなかで遺跡は残されたり壊されたりする。

出土した遺物は展示されたりもしますが、大部分は倉庫の中で保存されているのです。出てきた遺物の8割か9割は破片なので、そのまま展示はできない。それでも捨ててしまつては終わりなので、埋蔵文化財のセンターではそのようなものが入った箱を何百個と保管しています。もしか

して、後世それが何かの役に立つかも知れないということが残してあるのです。展示できるものは少ないですし、展示できるまでにかかる時間もながいのです。

自分が別府にいたとき、近隣の小学校だったか中学校だったかで、遺跡から出た遺物を触らせる、というイベントを何回かしたことがあります。博物館に入ったままだとそういった出土したものを触ることは絶対ないのですが、触らせると子ども達の感性が豊かになるので、実際に持つて触ることでそれらがどういったものであったのか感じてくれます。大人は触らないのです。壊すと困るからと。「落として壊しても良いですよ。その破片をすべて集めてくれれば、自分が持ち帰って接着剤でくっつけて復元しますから」と言ってもなかなか触らないですね。子どもはそうではないですが。

触ることはものすごく大切です。土器やら石器の図面を描くために実測するときも、細部を型取り機(マシ)という道具であてて描くにですが、細かいところの(こぼ)などは手で触ってそのまま図面に残します。ものに実際触ってみて感じる、形や重さなど感じるのは重要なことなので、今日のような機会があったときは是非触ってください。

参加者 A 美術館などでは昔は触れないものが多かったですが、この頃は実際触るようなことが増えていますね。博物館でもそつちの流れに行かないのですかね。

下森 もうすでにそうなっています。博物館でも、触ってもらえるような展示を増やしています。そのうちの一環として文化財のレプリカを作っ

て、本物は触れないけれどこつちなら触ってくださいと。いまは詳細なレプリカが作れますので。本物に触るのはリスクを伴うので、なかなかないのですが、場所によっては本物を触れるようになっていきます。今後はそういう展示が増えていくと思います。

早川 それでは質問もないようですのでこれで終了します。ありがとうございます(拍手)。

参加者(28名)

今川直樹、奥治房、奥裕治、門野和子、小西義光、小林宏子、坂向佳子、坂向惲乃、杉左近孝夫、杉左近弥生、大総慶一、田歌昇、田歌道子、辻徹、中川節子、中野英二、西堀晴美、早川博信、早川恵子、早川眞理子、早川由紀子、福本千枝子、福本人司、楨田範子、森下弘治、弥永雅代、渡辺淳、渡辺緑

二. 発言者(4名)

- A(40代、女性)
- B(60代、男性)
- C(60代、女性)
- D(60代、男性)